

講

評

評価委員 林 路 彰 (国立公衆衛生院名誉教授)

本研究班は、相互作用と乳幼児の心理行動発達に関する研究、並びに小児期の成長・発達と養育条件に関する医学的、心理学的及び社会学的研究の2本だてである。前者は既に母子相互作用を中心とした研究班の実績があり、また行動発達の定量的研究に関する方法も開発しつつあるので、初年度という制約にもかかわらず、実質的内容のある報告が多くみられる。

今回は相互作用の研究範囲を父子関係や同胞などとの関係にまで拡大する計画になっている。父親の家庭における役割が比較的軽視され、一方では父子家庭が増加する傾向にある。また、施設保育についてのニーズがたかまりつつある今日、父母の養育態度の形成とその評価、家庭保育と施設保育の相互作用などに関する研究は今後の発展に期待がかけられる。

後者の養育条件に関する研究では、心理学的、社会学的な側面の研究が遅れており、健康な乳児の発達に関する縦断的研究、乳幼児の健康及び発達に影響を及ぼす社会環境的条件、3歳児の気質 — 行動様式質問紙の標準化 —、乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件などに関する研究は、乳幼児の健康診査や保健指導に直結するテーマとして、その成果が行政にいかされるよう、十分掘りさげていただきたい。

特に問題の多い自閉症の発症予防に関する共同研究は、基礎研究を含めて貴重なものである。新しい分野の研究や方法の開発には基礎的かつ学際的な研究が必要なことはいうまでもない。サル中枢神経系における神経活性物質の発達、サル集団における相互作用と行動発達などは、動物における比較行動学的研究の一環として意義のあるテーマであるが、オタマジャクシの視覚行動に関する研究まで範囲を拡大するのは問題のように思われる。

親子関係の失調に関する社会病理的研究として、被虐待児症候群と愛情剥奪症候群に関する調査研究は、継続研究であるが、実態の究明と対策の検討に期待したい。母が主な虐待者になっているケースが多いことなど、種々の問題をなげかけている。

胎児期や乳児期の行動発達に関する研究は、研究方法の進歩とあいまって多くの貴重な研究成果を上げておられることに敬意を表したい。筆者は発達心理学の素養に乏しく、批判する資格を持たないが、母子の保健指導にあたって従来とかく弱点になっている心理学的、社会学的な面の指導に役立つ研究を一層推進していただきたい。

心身障害研究のような厚生行政に直結した研究課題は、行政目的から考えてテーマの選択にもおのずから限界があるはずである。また、その成果が行政活動に役立つようなものを期待されるのは、やむを得ないところであろう。しかし、問題は基礎データが学問的に価値の高いものであり、批判に十分たえられるものでなければならないということである。結果を急ぐあまりに独善的な結論を打ち出し、それが独り歩きすることは行政基盤を危くするものである。

研究期間が必ずしも十分ではないが、3年間の研究プログラムを実りあるものとするよう、研究計画をさらに充実し、あるいは修正しながら、有終の美を飾っていただきたい。終りに、初年度の研究報告としては、内容が豊富で立派な成果を上げられたことを高く評価したい。